

宮崎市定著『科挙 中国の試験地獄』の漢字

池田証寿（北海道大学）1998年12月22日

1 宮崎市定著『科挙 中国の試験地獄』について

この書は、中公新書15として1963年5月25日に初版が発行された。（池田の手元にあるのは、1977年7月30日30刷。別紙の画像コピーはこれによる。）その後も版を重ね、1984年2月10日には中公文庫として刊行されている。（池田の手元にあるのは、1998年2月20日8刷。）

その内容は中国の官吏登用試験として隋の時代から清の時代に到るまで行われた「科挙」について述べた書物であり、名著として世に知られるものである。

著者の宮崎市定は、元京都大学名誉教授、専攻は中国の社会、経済、制度史である。

「科挙」という中国の制度を達意の文章で分かりやすく一般向けに解説した書であり、版を重ねていることから、中国の社会や制度史の入門テキストとみなすことに異論はないであろう。

2 宮崎市定著『科挙 中国の試験地獄』のJIS外漢字

倉卒の調査であるので、遺漏なしとはし難いが、若干のJIS外字を見出したので報告する。これらは今回の漢字拡張の追加候補としての条件を満たしていると判断できるものである。

2.1 公開レビュー資料に見えない漢字

まず、現在公開中の新JIS漢字（第3・第4水準）レビュー資料に見えないものを掲げる。

(1) 丟 諸橋大漢和番号144、新字源なし、漢語林なし、UCS4E22、音チュウ、用例「(ちゆう)紙(し) 答案紙、または草稿紙を地面におとすことはそもそも不謹慎な行為である上に、常に換巻の機会をつくることが多い。」、新書38ページ・文庫51ページ、別紙資料A、ik8001.bmp（別途送付の画像ファイル名）。

(2) 攙 諸橋大漢和番号12991、新字源なし、漢語林2865、UCS6519、音ザン、用例「(ざん)越(えつ) 他人の空席を見つけて割りこむこと。」、新書39ページ・文庫51ページ、別紙資料B、ik8003.bmp ページ、別紙資料B、ik8003.bmp

(3) 廩 諸橋大漢和番号なし、新字源2231、漢語林2031a、UCS5EEA、音リン、用例「これを受ける生員を(りん)生(せい)と称した。」、新書47ページ・文庫60ページ、別紙資料D、ik8005.bmp

(4) 劄 諸橋大漢和番号なし、新字源なし、漢語林637、UCS5284、音サツ、用例「今日まで空前の名著と称せられる『廿二史(さつ)記(き)』その他の著書を数多く著して」、新書135ページ・文庫153ページ、別紙資料G、ik8008.bmp

(5) 掇 諸橋大漢和番号12241、新字源2984、漢語林2721、UCS6387、音テツ、用例「技勇は開弓、舞弓、(てつ)石(せき)の三学科にわかれる。」、新書169ページ・文庫188ページ、別紙資料J、ik8011.bmp

(6) 垓 諸橋大漢和番号 5051、新字源なし、漢語林なし、UCS579E、音ダ、用例「朱(しゆ)彝(い)尊(そん)、というよりはむしろ雅号の竹(ちく) (だ)で通っている人であろう。」、新書 177 ページ・文庫 196 ページ、別紙資料 K、ik8012.bmp

2.2 説明

以上の例は、一般向けの文庫・新書に見えるが、今回の追加候補に挙げられていないものである。

特に、(4)「劄」は、『日本国語大辞典』(小学館)の掲出語として見えているし(別紙資料 M)、大塩平八郎の著書『洗心洞劄記』に用いられる漢字であり、『国書総目録』第五巻(岩波書店、1967 年第 1 刷。今、1990 年補訂版第 1 刷による。)でもこの表記がなされている。

小型・中型の国語辞典を見ても、山田忠雄主幹『新明解国語辞典第四版』(三省堂、1997 年 3 月 31 日第 30 刷発行)、松村明編『大辞林 第二版』(三省堂、1995 年 11 月 3 日第 2 版発行)、山田俊雄他編『新潮国語辞典 現代語・古語』(新潮社、1984 年 2 月 20 日新装改訂第 2 刷発行)に使用例がある。

新村出編『広辞苑 第五版』(岩波書店、1998 年 11 月 11 日第 5 版第 1 刷発行)には、「さっき【劄記】読書して得た所を随時に書き記した書。とうき。「洗心洞」(大塩平八郎の著書)」と説明する。(1991 年 11 月 15 日発行の第 4 版第一刷も同じく「劄記」と表記。)

『洗心洞劄記』と表記する例は、ネットワークで検索しうるが、しかしこの(4)をも包摂するのは無理があろう。

また、参考までに記せば、「劄」は諸橋大漢和の掲出漢字ではないが、「劄記」の説明文中に見えている。(別紙資料 N)

「劄」が広く使われているにも関わらず、補助漢字に採録されず、また、今回の調査からも拾えなかったことは、ひとえに諸橋大漢和の掲出字でなかったからである。(内容的には大漢和の補遺に掲げてしかるべき例である。)

この(4)の漢字は追加候補とする条件を十分満たしていると判断されるので、追加を特に要望する。

(6)「垓」は、人名の例であるが、諸橋大漢和の別の箇所では、異なる字体に作っており、字体の安定性に欠けるとの批判はある。(別紙資料 O 及び P 参照。これは縮写版によったが、修訂版でも同様であることを確認した。)

(1)(2)(3)(5)はまだ他の資料の用例を見出していない。

2.3 公開レビュー資料に見える漢字

現在公開中の新 JIS 漢字(第 3・第 4 水準)レビュー資料に見えるものを参考として掲げる。

2.3.1 NJ-ksbyb.pdf(要調査分)に見える例

(7) 稜 諸橋大漢和番号 31453、新字源なし、漢語林なし、UCS8470、音スイ、用例「同考官ばかりでなく正考官たる柏(はく) (すい)までが不正に連なっていることがわかったので」、新書 100 ページ・文庫 115 ページ、別紙資料 F、ik8007.bmp、(140-9-3R)。

2.3.2 NJ-klstb.pdf に見える例

(8) 盼 諸橋大漢和番号 23167、新字源 5282、漢語林 5282、UCS76FC、音ハン、用例「顧(こ) (はん) 四方八方を見まわして...」、新書 39 ページ・文庫 51 ページ、別紙資料 B、ik8002.bmp、(109-4-2)。

(9) 侷 諸橋大漢和番号 572、新字源 206、漢語林 206、UCS4F7E、音イツ、用例「これを(いつ) 生(せい)、俗に半個秀才、すなわち見習い生徒という。」、新書 41 ページ・文庫 54 ページ、別紙資料 C、ik8004.bmp、(9-6-7)。

(10) 硃 諸橋大漢和番号 24147、新字源 5428、漢語林 5155、UCS7843、音シュ、用例「こうして朱字で写しとられた (しゆ) 巻(かん) は、次にもとの原本である墨巻と一しょに校正係へまわされる。」、新書 83 ページ・文庫 98 ページ、別紙資料 E、ik8006.bmp、(112-6-2)。

(11) 沔 諸橋大漢和番号 17207、新字源 4104、漢語林 4104、UCS6C94、音ベン、用例「王(おう) (べん) なる大臣があり」、新書 135 ページ・文庫 153 ページ(ただし「沔」に作る。)、別紙資料 H、ik8009.bmp、(85-4-8)。

(12) 詹 諸橋大漢和番号 35458、新字源 7621、漢語林 7169、UCS8A79、音セン、用例「また、(せん) 義(ぎ) という人が進士及第試験ののちに」、新書 150 ページ・文庫 168 ページ、別紙資料 I、ik8010.bmp、(149-6-3)。

(13) 設 諸橋大漢和番号 9844、新字源 2295、漢語林 2094、UCS5F40、音コウ、用例「我が中二」、新書 184 ページ・文庫 204 ページ、別紙資料 L、ik8013.bmp、(57-10-1)。(これは漢詩の例で、読みも記されていないが、参考のために挙げた。)

この他、NJ-klstb.pdf の 163-3-1 の例を 147 ページに見出したが、上の例と同様に、既に採用候補であるので、用例、字書番号等は省略する。

院試は入試最後の本試験なので、最も厳格に実施されねばならぬとされている。多数の童生と一緒に集めるため、互いに静粛を保たせ、また不正行為を防止しなければならぬ。そのために学政は十個の異なる印を用意し、童生に不当な行為ありと認められた時は、直ちにその場にきて答案紙の上にその内容に応じてそれぞれの印を押すのである。十個の印とは、

〈移席〉 自己の席を離れること。童生は一回かぎり、飲茶及び出恭（小用）のために座席を離れることを許されるが、その時には答案用紙を係員のもとに提出して置き、用が終わった後に受領して書き続ける規定になっている。しかし童生はその手続きがめんどうである上に時間も惜しいので、多くは不浄壺を持ちこんで座席の下において用を足すという。もし無断で座席を離れたときには、直ちに係員が来て、答案の書きかけのところへこの印をおす。

〈換巻〉 両人が互いに答案紙をとりかえること。あらかじめ共謀し、学力ある者を頼んで代作してもらおうとしたのではないかと嫌疑がかかる。

〈丟紙〉 答案紙、または草稿紙を地面におとすことはそもそも不謹慎な行為である上に、常に

換巻の機会をつくる人が多い。
話しいい。

〈顧盼〉 四方八方を見まわして他人の答案をのぞきこむこと。

〈擽越〉 他人の空席を見つけて割りこむこと。

〈抗拒〉 係員の指図にしたがわないで反抗すること。

〈犯規〉 答案作成上におかした規則違反。

〈吟哦〉 口の中でぶつぶついうこと。特に詩を作る時に韻をととのえるためにやる人が多い。

が、これは他の童生の迷惑になることおびただし。
日没になっても答案が未完成の場合は、その最後のところへこの印をおす。いつのまにか、誰かが書き足しておかぬともかぎらないからである。

C

一日おいて後に成績発表があり、この際には入学定員だけに絞るので、これで合否はほとんど決定されたも同様である。合格者は各県学の入学定員のほかに、各県の童生の中から、比較的成績の良好な者を選んで府学の定員にあてる。さらにその上に若干の予備者を取り、次の機会に県試・府試を省略して直ちに院試に赴く優先権を与える。これを俗生、俗に半個秀才、すなわち見習い生徒という。

G

清朝初期には、読巻大臣はその名の示すように実際に答案を読んで天子に聞かせた。これはさうに古い淵源をもち、宋代においても考官が殿試の答案の優秀なものを選び、天子の前でかわるがわる読んでさせた。宋代の仁宗の長い治世中、王沔なる大臣があり、しばしば殿試の考官となった。音声の清らかで文章をよむ時のふしまわしがよく、王沔の読む答案はいつも天子の気にな

D

学校の定員には二つの意味がある。がんらい、定められた学校の生員の人数は大きな学校でも四十人をこえず、小さな学校では十五人と定められていた。これが本来の定員であって、そのほかには生徒の入る余地がなかった。生員は小人数であるから政府は各人に食費の意味で学資を給したが、これを受ける生員を廩生と称した。この定員が厳重に守られると、廩生が死亡するか、あるいは抜擢されて中央の太学、国子監に進学して欠員が生じないかぎり、新たな生徒を入学させるわけにはいかない。しかるに、地方人士の間では生員の身分は科擧に應ずる権利につながるので、定員増加の希望はなほ大切なものがあり、政府でも輿論にかんがみ、学資を支給しない生員若干名の入学を許すことにした。これを增生という。この人数は先の廩生とほぼ同数である。

E

この生員は、そのために数千人の写字生が雇われている。のだから、大へんな労力であるが、そのために数千人の写字生が雇われている。こうして朱字で写しとられた硃巻は、次にもとの原本である墨巻と一しょに校正係へまわされる。ここにも数百人の係がいて両者を読みあわせる。ここでは必ず黄色の筆を用い、写しちがいを発見すれば訂正する。その際、写字係も校正係もその姓名を記しておいて責任を明らかにし、もしあとで不正が発覚すると処罰されることはいうまでもない。

F

調査官が合格者の答案を調べて行くうちに、どうしても合格するはずのない違式の答案が出てきた。そこでなおいきをつけて調査すると、疑わしい答案五十枚のうち、十二枚は確かに不正が行なわれたに違いないという結論に達した。そこで本人をよび出して訊問すると、それからそれへと事件が発展して、同考官ばかりでなく正考官たる柏後までが不正に連なっていることがわかった。

いたので、将来の躍進を期待されてレノナズ、それからはだんだん実際政治からは遠ざかるといふものの頼りにならないことを悟ったのであろう。それからはだんだん実際政治からは遠ざかり、ひたすら勉強に志したが、特に歴史学に興味をもち、今日まで空前の名著と称せられる『廿二史劄記』その他の著書を数多く著わして後学に益を与えることになった。およそ中国史学に志す者、彼の著書の恩恵に浴さない者はないであらうと思われる。これはいわば怪我の功名とも称すべきで、掃いてすてるほどある政治家になってもらうよりは、その特色ある学風で歴史学に貢献してもらった方がどれほど後世のためになったかしののである。

H

学に貢献して、ナブスとわい、行なう。清朝初期には、読巻大臣はその名の示すように実際に答案を読んで天子に聞かせた。これはさらに古い淵源をもち、宋代においても考官が殿試の優秀なものを選び、天子の前でかわるがわる読んでかかせた。宋代の仁宗の長い治世中、王沔なる大臣があり、しばしば殿試の考官となった。音声が清らかで文章をよむ時のふしまわしがよく、王沔の読む答案はいつも天子の氣に

官が殿試の答案の優秀なものを選び
い治世中、王沔なる大臣があり、し
ふしまわしがよく、王沔の読む答案
(文庫)

I

また、詹義という人が進士及第のうちに、みずから嘲る詩をつくった。
読本詩書五六担 車にいっぱいつんだほどの経書をよんで
老来方得一青衫 老いこけてからやっとありついた官員様の肩書

J

以後の試験をとりやめとす。
第二回は県庁の中庭で行なわれ、これには歩射と技勇とがある。歩射は五本の矢を射、五十歩隔たった円形の的を射させる。四発以上あたれば双好で優、二発以上が単好で良、一発であれば合式の佳で以上が合格、一本もあたらぬものは失格とされる。技勇は開弓、舞刀、掇石の三科にわかれる。開弓は強い弓を満月のごとく引きしぼらせる試験で、弓力の強さを重さで表わし、百二十斤、百斤、八十斤の別がある。中国の一斤は日本の百六十匁一斤とほとんど完全に合致する重さで六〇〇グラムにあたる。百二十斤の力の弓を開けば優、百斤が良、八十斤が佳である。

K

して試験を行なった。そしてこのおかげで、林院の官に任じ、明代の歴史を編纂することを命じたのである。
この際の及第者の代表的な人物は朱彝尊、というよりはむしろ雅号の竹垞で通っている人である。昔から学問と文章は両立しがたいとされているが、朱竹垞は経学に造詣が深く、立派な著書を幾つか著わしたほか、文章家としても詩人としても清朝で有数の名家である。朱竹垞は明末に生まれ、明が亡びたのは彼の十六歳の時であったから、いわば戦中派の一人であった。彼は家が貧乏である上に戦乱のやまない時であったので、つい科挙を受ける時期を失しただけで、いま五十歳になって征服王朝の天子から特別の招請を受けても、それに応ずるのに別にうしろめたさを感じないでもよかったのである。

L

考え出したのは創業の君主、太宗である。太宗は科挙のあと、新進士が意気揚々として、列をたぐって官庁から退出する光景を見て、
天下英雄入吾彀中矣 天下の英雄はみな俺の袋の物になったぞ
と叫んだという。しかし、実際に自尊心の高い貴族をほとんどすべて袋の中のものにしてしまうには、唐一代三百年ほどの日数を要したのである。

劄

さっしき【劄記】『名』(「さっし」は「劄」を「札」の義に用いた慣用音で、ものを書きしるす簡札) 読書したときの感想・意見などを、気のむくままに書き記したものを。随想録。「二十二史劄記」「洗心洞劄記」など。*湛園札記「序」然劄子古人頗用之以奏事、注疏家未嘗及之、兼劄記一名書、古人多有」
【発音】(標)之(四)

N

【劄記】³ ^{サツキ} 書を読んで、得る所のあるに随ひ、輯録したもの。劄の音はタフ。これをサツと読むのは、札と同字に俗用したことによる。札は簡札で、これに書いて纂集したものを、札記即ち劄記といふ。清の閻若璩の潜邱劄記、趙翼の二十二史劄記の類。(湛園札記、原序) 余本題ニ札

M

坨

〇 【竹坨】²⁶¹_{ダク} 清、朱彝尊(6-14424・631)の號。

坨

【朱彝尊】⁶³¹_{イジュン} 清の人。國祚の曾孫。字は錫鬯。

號は竹坨・甌舫(鷗舫)・小長廬釣魚師・新愜齋・

金風亭長。康熙中、鴻博に擧げられ、檢討に拜せ

らる。明史の編修に與り、後、内廷に入直す。

其の學考證に長じ、詩は王士禎と南北の兩大宗

と稱され、詞は陳維崧と共に朱陳と稱さる。康

熙四十八年卒す、年八十一。書室を曝書亭・娛

老軒・靜志居・潛采堂といふ。著に曝書亭全集・

經義考・明詩綜・詞綜・日下舊聞・五代史補注・瀛

州道古録・禾録等がある。(清史稿、四百八十

九)・(清史列傳、七十一)・(國朝耆獻類徵、一百

十八)・(碑傳集、四十五)・(國朝先正事略、三十

九)。

P